
赤い糸

皿尾 りお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Nコード】

N4148D

【作者名】

皿尾 りお

【あらすじ】

あなたの赤い糸は、誰に続くのだろう・・・

彼は、いつも、バス停から花屋を見ていた。

始めは、気にも止めなかった。

彼は、ある日、白い杖を突きながら店に入って行く彼女を見た。

その日からだ。

そこで、働く彼女。

高校からの帰りのバスを待つ間。

バス停の向かいの花屋。

彼女は目が見えない。

白い杖を見るまでは、わからなかった。

バスを待つ間は、いつも、彼女を見ていた。

花屋で客に笑いかける彼女。

彼女の笑顔は、店先のどんな花より可憐に見えた。

毎日、見つめた。

毎日。

彼は恋に落ちていた。

花を買おう。

そう、思った日から毎日、花を買った。

バス停近くの横断歩道を渡り、毎日、花一輪。

「これ、下さい。」

そう言って、彼女に手渡す。

「スマイレですね。」

彼女は、手渡したただけですぐにわかり、微笑む。

「これ、下さい。」

「カスミソウですね。」

そう言って、微笑む。

それだけの、関係。

たった、それだけの。

それだけで良かった。

雨の日も。

晴れた日も。

そして、とても、晴れた日。

彼は、いつも通り、横断歩道を渡ろうとした。

・・・車が来た。

・・・彼は、渡り切れなかった。

花屋の店先はもう、目の前。

彼は、その薄れゆく意識の中、彼女の背中を見つめていた。

薄れゆく意識の中。

流れだす血。

流れる血。

花屋の店先まで流れ出す。

彼女の足元まで流れ出す。

彼女は、ふと、振り返る。

ゆっくり、しゃがみこむ。

しばらく、地面を見つめる。

彼女の頬を涙が伝う。

こぼれ落ちた涙が、血と混ざり合う。

それは、見た事もない美しい色だった。

きっと、彼女しか見えないような・・・

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4148d/>

赤い糸

2010年12月1日07時14分発行